

親子関係研究の課題

小 嶋 秀 夫

目 次

一	相関的研究	90
1	因果関係の決定	90
2	発達の研究	91
二	過程分析的研究	93
1	実験法の問題	93
2	調査法の問題	94
三	測定の問題	95
3	理論	95
1	信頼性と妥当性	96
2	独立変数のとりあげかた	97
3	素朴さの必要性	98
四	理想的な親子関係	98

新聞などで、生徒の非行が報じられるとき、おわりによく、「親は子どもを、完全に放任していた」とか、「両親ともに、子どもに對して無関心であつた」などと書かれている。また、子どもの心理やしつけに関する本を開いてみると、たとえば、厳格な親の子どもはどのような子どもになりやすいか、溺愛する親の子どもはどうかなどと、かなり割り切つた調子で書かれていることが多い。このように、今日、子どもの問題に對して、親のありかたがいかに重大な影響をもつかということは、一般にかなりよく認識されているようである。もともと、親子關係の研究——すなわち、子どもの人格・行動（從屬變數、後続變數）に對する親の態度・行動（獨立變數、先行變數）の影響の研究——は、育児法、しつけのありかた、ホスピタリズム、青少年非行、子どもの問題行動などの実際的な問題の解決のために進められてきた。しかし、三十数年にわたるこの領域の研究から得られた知見は、一般に考えられているほど、割り切ることのできる、決定的なものではない。初期の、比較的素朴な方法を用いた研究とはことなり、一九五〇年代以降の研究は、一般的にいつて、親側や子ども側の變數を、より正確に、より直接的に測定しようとするようになり、結果は單一性に欠けてくる。兩變數間の關連性は、必ずしも高くないこともあるし、また、このような關連をのべるときには、すくなくとも、親の性×子どもの性の4群について、また、ある場合には、子どもの年令水準別や、家族が属する社会的階層別にのべられる必要があることがわかつてきている。ここで筆者は、親子關係の心理学的研究が当面している問題と、今後の研究の方向をさぐりたい。そして、他の方々から、研究についての示唆を得られたら幸いである。ただ、時日や紙面の制限、筆者のレパートリーの狭さなどのため、ごくわずかな点を、スケッチ風

にまとめるに留まることは残念である。また、獨立變數あるいは先行變數として、子どもに對する親の態度・行動を直接にとりあげない場合（例：子どもの出生順位、親の人格や価値観などを問題にする場合は、考察の対象からはずした。はじめに、研究を二つのカテゴリーにわけ、それぞれのカテゴリーに属する研究の問題点を検討する。つぎに、各研究に共通した問題点をさぐることにする。

一 相關的 研究

一方で、親の子どもに對する態度・行動を測定し、他方で、子どもの人格・行動を測定して、兩變數間の相互關係をさぐる研究が、このカテゴリーに入る。この種の研究は、じつに多いが、一つだけ例をあげてみよう。

Baldwin (1948) は、保育園での自由あそびのときの子どもの行動と密接な關係をもつものとして、親の態度・行動の民主性と統制(control)とを考えた。子どもは、四才くらいの幼児六七名で、親の態度・行動の記述は、家庭訪問をした研究者の評定によつてゐる。統制を一定に保てば、民主性は、活動的で、計画性に富み、恐れを知らず、リーダーになりやすい子どもをつくりやすいが、同時に、子どもを残酷で攻撃的にしやすいこと、また、民主性を一定に保てば、統制は、けんか、拒否(抵抗)、不従順などを減少させる傾向のあることを見出した。

この種の研究上の問題点の一、二をあげてみよう。

1 因果關係の決定

たとえば、ある時点で測定したときに、民主的な親の子どもは、進取の気性に富んでいたと仮定する。そのときすぐに、民主的な育

てかたをする、進取の気性に富んだ子どもになると結論することはできない。一般的にいつて、変数 X と変数 Y との間に、正または負の有意な相関があるということは、(a) X が Y の原因である。(b) Y が X の原因である。および、(c) X も Y も、第三の変数 Z の結果である。のいずれかであることを示すにすぎないといわれる。さらに、筆者は、これら三つの場合は、相互に完全に排斥するものではないと考える。ある時間の中をとって考え、(a)と(b)の混合、すなわち、 X と Y との影響関係の循環が考えられる。(この影響関係のきつかけは、 X でも Y でも Z でもありうる。)

したがって、上述の例の場合も、因果関係について、すくなくとも三つの可能性がある。(a) 親が子どもに対して民主的な取り扱いかたをする程度が、子どもが進取の気性をもつ程度の原因である。(b) 子どもが、進取の気性をもつ程度が、親が子どもを民主的に扱う程度を決定する。(c) たとえば、ある社会的階層に特有な価値観が、種々の媒体を通して親と子どもに伝えられ、親をして、子どもを民主的に取り扱うようにさせ、また、子どもをも、進取の気性に富んだ人間にする。

科学の目標は、「いかなる状況下で、いかなることがおこるか」という、事象間の関数関係を知り、かつ、事象を操作するための知見を提供することであるとすれば、事象間のたんなる相関関係の発見だけでは不十分である。研究対象となっている諸事象の変動をもたらすために操作される先行諸条件を、明確にとり出す試みが必要になってくる。これは、たんなる相関的研究からはあきらかにできない。関連を見出すために、いかなる方法が用いられても、事情は同じである。

Finney (1964) の方法は、親子関係の研究の領域では重要である

と認められていた (Hamlin & Vanderplas, 1961) が、まだ試みられなかったものである。かれは、子どもの人格特性に関する評定と、母親の態度・行動に関する評定と検査得点とから、一つの相関行列をつくり、因子分析した結果、三因子を抽出した。(a) 親の過保護と過度の統制——子どもを強迫的にする。(b) 親のあたかさと愛情の欠如——子どもの受動的依存性、悲観および不安をもたらす。(c) 親の敵意——子どもに敵意をうえつける。しかし、ここでも正確には、親側の要因が、子ども側の要因をもたらすのであるとはいえない。

因果関係を示すには、二でのべる実験的研究によらなければならない。

2 発達の研究

発達の研究は必ずしも相関的研究ではないが、従来の発達の研究は、この種のものが多く、ここに入れた。前述の因果関係の決定のための手がかりを得る方法の一つに、時間軸をいれるやりかたがある。たとえば、初期の親の態度・行動と、のちの子どもの人格・行動との関連をさぐるのである。この種の研究の多くは、まず、子どもの特定の特性をとりあげ、それと関連のありそうな過去の親側の変数を、回顧的な (retrospective) 方法で親からさぐるというやりかたをとっている。たとえば、非行児とそうでない児童の過去の親子関係のありかたを調べ、両群間に差があるかどうかを検討したりする。このさい、回顧的に得られた親側の測度の妥当性が問題になる。たとえば、非行児の家庭では、そうでないものの家庭と比較して、子どもが幼ないときに、家族内での葛藤や不一致が多いということが、かりに見出されたとしても、それは、両変数の真の関

数関係を示しているとは限らない。それはただ、現時点における二変数間の関係——すなわち、以前の家庭はこうであったと、いま親が思っているという事がらと、子どもの非行との関係——を調べているにすぎないのかも知れない。どのようなことが事がらについての回顧的報告が、どのような歪みをうけやすいかについての経験的研究が、今後、さらに組織的に進められる必要がある。

Kessen (1960) は、 $R = f(A, S)$ のタイプの発達研究 (R : 反応, A : 年令, S : 環境) では、いくつかの理由で、縦断的研究をするべき十分な根拠があるとしている。子どもの発達を決定する興味ある環境的条件の大部分は、"lost sign" の性質をもっている。たとえば、初期に子どもが親からどのような取り扱いをうけたかは、そのときに記録しておかなければならない。これにかわる方法として、回顧的報告が使用されるが、先にのべたように、妥当性に問題がある。また、諸変数が複雑な交互作用をなしていることも、縦断的研究を有利にする。

この領域での本格的な縦断的研究は、きわめてすくない。Murphy (1962) らのグループは、乳児期における口唇の充足や、摂食場面での問題および母親によって許容される自律の程度などと、就学前の時期を中心とする子どもの行動 (中心的概念として、*coping efforts* が使用される) との相関関係を調べている。

より体系的な研究としては、有名な Berkeley Growth Study の一環として、Schaefer & Bayley (1963) らが行なったものがあげられる。かれらは、子どもに対する母親の行動を、愛情—敵意、自律—統制の二次元を基礎においた *circumplex order* により考え、子どもが〇—三年のとき (観察による評定) と、九—十四年のとき (母親との面接による評定) との二回にわたって測定した。子ども

の行動は、一〇—三十六カ月、二七—九六カ月、九—一二年、一二—一八年の四回 (実際には、各時期をさらに細分して観察をくり返している) にわたり測定し、その評定結果も、各年令段階において、できるだけ *circumplex order* に構成した。両変数間の相関 (Pearson の r) を男女児別に求めた結果の一部を次に紹介する。なお、被験者は、はじめ男女各二十七名で出発したが、おわりには各一三名となっている。

まず、子どもが〇—三年のときにおける母親の愛情—敵意の次元をみると、(1)それは、同じ時期における男女児の、幸福で、穏やかで、ポジティブな行動と、(2)それは、女児では、四年までを通して、ポジティブな社会的、課題志向的行動と、(3)それは、男児では、一二年までを通して、ポジティブな課題志向的行動と、それぞれ有意な相関を示している。しかし、(4)それは、男児では、検査場面での、ポジティブな社会的、情緒的反応と高い相関を示すが、のちになると、(3)での結果とことなつて、相関が低下して行く。(5)それは、男児では、一〇—三十六カ月の行動とよりも、六—九年のときの行動とより高い相関を示す。かれらは、(6)の結果を、一貫した母親の行動は、子どもの行動に累積的な効果をもつことをあらわしているのかも知れないと解釈している。

つぎに、子どもが九—十四年のときにおける母親の愛情—敵意の次元は、(6)男児では、研究された全年令での子どもの行動と有意な相関を示すのに対して、(7)女児では、青年期での行動とのみしか有意な相関を示さなかった。かれらは(2)と(3)の結果の比較とあわせ考えて、男児の適応は、それまでの対人関係のありかたの全歴史を通して発展してきた、より安定した諸構造の反映であるのに対して、女児の適応は、そのときそのときの対人的状況をより強く反映する

のみではないかと解釈できるとしている。

そのほか、子どもの社会的、情緒的、および課題志向的行動は、ある程度まで、子どもがうけてきた親の行動に対する反応であるのに対して、子どもの活動性―受動性の次元における行動の場合のように、親の行動とは比較的無関係で、生得的諸傾向の影響が考えられることもあるとされている。

この研究については、いろいろ検討しなければならない問題が多いが、ここでは、因果関係の決定に関するところのみを考えてみよう。論理的にいうと、 X と Y とが相関し、しかも X が時間的に Y に先行すれば、 X が Y の原因であるとはいい切れない。なぜなら、第三の不变のまたは変動する要因 Z があって、それが X と Y の決定因として働いているかも知れないからである。

相関的研究は、二組の変数間の関連を調べるやりかたをとる。とりあげられる変数は、概念的に、相互に遠くへだたっていることもあれば、近いこともある。いずれにしても、この種の研究では、どのようなメカニズムによって、両変数間に関連がみられるのかを、あきらかにすることはできない。Schaefer & Bayley (1968) の研究を、今後発展させて行く道は、得られた諸仮説を検証して行くような研究を行なうことであると考える。一般的にいうと、相関的研究は研究の初期の段階に有効な方法であるといえる。

二 過程分析的研究

ここには、親側と子ども側の変数相互の間の影響関係のメカニズムを探究しようとする研究が含まれる。二組の変数は、なんらかの意味で、論理的に直接に関連づけることができず、両者の間にギャ

ップが存する。そのギャップを、理論的な概念設定によりうめて、影響関係についての論理的なくさりをつなこうとするのが、この種の研究である。

このカテゴリーに入る研究を、研究法からわけると、およそ三つになる。一つは、臨床的な研究であって、のちの組織的な研究の基礎として欠かせないものである。親子関係の研究では、主として精神分析の立場によった maternal deprivation の研究が目立つ。他の二つは、実験法と調査法で、諸条件をより厳密に分析して行くものである。ここでは、まだ認知説への接近をあきらかに示していなかった S-R の学習理論にもとづく研究が目立つ。この領域での研究の問題を、いくつかひろってみよう。

1 実験法の問題

ある独立変数 X と、ある従属変数 Y との関連を見出すためには、通常、つぎのような手続きがとられる。(1)かなり大きな、同質的な標本を得る。(2)独立変数 X を操作してつくり出したいくつかの実験的状況に、標本群を無作為にわりあてる。このさい、 X （一箇またはそれ以上）以外の変数は、すべて同一に保っておく。(3)各実験群について、従属変数 Y を測定する。

もし、このような手続きが、親子関係の研究にも適用できれば、これは、因果関係に関しての知見を与えるだけでなく、実際上の問題の解決を目的として、独立変数を操作するための手がかりをも与える。しかし、現実問題として、人間の親子関係の領域で、諸条件を人為的に操作することは、人道上の問題からしても不可能に近い。人間に対しても、このような実験的操作が可能な領域としては、比較的瞬時的な精神力学をさぐるための研究と、治療を目標と

した研究が考えられる。ともに、特定の行動の強化や消去に關係するものがとりつきやすいであろう。

動物実験でうちたてられてきた強化や消去の諸原理の多くは、人間にも適用できることがわかってきて、実際的な問題にも適用され、成功している。ここ二・三年、子どもを被験者としたこの種の研究がじつに数多い。しかし、親子關係の事態に、これらの諸原理を導入した実験的研究は、まだあまり報告されていないようである。

Patterson, Litman, & Hinsey (1964) が、五・九才の男児一九名と女兒二名、およびかれらの親の一方(父か母かは無作為にきめる)を被験者として行なった研究の一部を紹介する。実験室をトレイラーに積んで各家庭を訪問し、実験室内に子どもと親をいれる。そこには、一つの箱がおいてあって、その上部に二つの穴があけてある。子どもは、ガラスのマープルを、どちらか好きなほうに、一度に一つずつ、つきつきに入れるように教示される。最初の一〇〇反応を基礎オペラント水準として、ここで少なくともいれられたほうを、つきに強化する。はじめに1対1で二〇回強化し、ついで4対11の割合(可変スケデュール)で四〇回強化する。強化は親が、強化すべき子どもの反応がおこるとすぐに、「よくやってるね。」とか、「いいね。」とか発言することによりなされる。いつ発言すべきかは、記録機と連動した装置によって、親にイヤフォンで伝えられる。親は、子どもの右前方にすわっていて、イヤフォンで、カチリという音をきくたびにすぐほめるのである。強化の測度としては、どちらの穴を選ぶかという好みの変化(オペラント水準と条件づけ時の反応の差)の大きさを使用した。結果の一部分をのべると、つぎのようになる。(1)親は、子どもの反応の好みを変える

のに、有意な効果をもっている。(2)父親は娘に対して、母親は息子に対してより効果的な強化者である。

上の例からもわかるように、実験法が適用できる問題領域は、限られたものである。その範囲内で実験的方法の問題点をいくつかあげてみよう。被験者に関したことからでは、特定の母集団から無作為に標本抽出することは不可能に近い。したがって、はっきりとした結論を出すためには、二またはそれ以上の数の標本を使って、研究をくり返す必要がある。条件の統制に関しては、Hamblin & Vanderplas (1961) もいうように、社会科学などにおいては、独立変数の変動をのぞいた他のすべての点で、二つあるいはそれ以上の状況を同一であるようにそろえるのは、二つの点で不可能である。(1)測定が不完全であること。対応づけによる諸変数の統制は、せいぜい、測定と同水準の精度でしかなされない。(2)どの変数は無視してよいか、どの変数は、サンプリングによってうまく統制しなければならぬかについての情報が不足しているから、対応づけによる諸変数の統制が困難である。

2 調査法の問題

調査法では、研究者が独立変数を操作・統制して、各群に被験者を無作為にわりあてるのでなく、自然に存在する独立変数の変動を利用して、所定の条件に適合する被験者を選択する。自然的実験法とよばれることもあるが、被験者の無作為なわりあてや、条件の実験的操作・統制がなされていないという点で、「実験」とはことなる。この方法は、純粹な実験法では扱かうことのできない広範囲の問題を扱えるという点ですぐれている。

この研究の素朴なタイプ例として、多くの maternal deprivation

ation の研究をあげることができよう。ここでは、しばしばある特定の時期を、施設ですごした子どもと、そうでない子ども(統制群)とを、いろいろの局面から研究して、グループ差を見出そうと試みられる。しかし、ここには多くの問題がある。まず、独立変数の問題からいえば、施設で育った子どもが、必ずず maternal deprivation を経験し、家庭で育った子どもは、そうでないかには疑問がある。すなわち、maternal deprivation は家庭内でもおこりうるのである (Ainsworth, 1962)。そのほか、両群が同一の母集団からひき出されたという保証はないし、統制された要因以外のどの要因に関して、両群がどのようににことなっているのかわからないことが多い。たとえば、施設児は、施設に入る以前から、すでに、他の子どもとくらべてことなっていたのかも知れない。また、施設での生活は、maternal deprivation 以外の点でも、家庭での生活とことなっているかも知れない。

よりめんみつな親子関係の研究も、ほぼ大部分が、このカテゴリーの研究に入る。たとえば、子どもの攻撃性の先行変数としてとりあげられる諸変数(子どもが家庭で経験するフラストレーションの程度、子どもが行なう攻撃行動に対して与えられる賞と罰の量など)、子どもの依存性の先行変数としてとりあげられる諸変数(母親が子どもの依存行動を許容する程度、親が子どもに向ける注意と賞讃の量など)などは、すべて研究者が直接的に統制するものではない。したがって、先にのべた諸問題が、すべてあてはまる。

実際問題として、この方法をとらなければ親子関係の研究は進歩しないであろう。調査法という名前を仮に与えてみても、観察法、質問紙法、面接法、検査法などを併用するのであるから、方法的にいうと、これは相關的研究と大差はない。ことなるのは、理論的

な方向づけであって、この研究では、独立変数と従属変数との間に介在するメカニズムを探るために、程度の差はあっても、ある特定の理論からひき出された仮説を検証しようとする試みがみられることである。

3 理 論

親子関係の研究という立場で考えると、動物実験をもとにして樹立された理論の体系は、一種の proto-theory である。親の態度・行動が、子どもの人格・行動におよぼす影響をさぐるためには、その理論をより発展させ、洗練しなければならぬ。しかし、現段階では理論が複雑な事態に適用できるほど発展していない。S-R の学習理論のなかで、実際の問題への適用という意味で、もっとも発展したものといえるものの一つとして、葛藤—置きかえの理論があげられる。これは、Miller (1948), Dollard & Miller (1950), Whiting & Child (1963), Bandura & Walters (1959) と順を追って発展させられたものである。筆者(一九六二)も、この理論を幼児の攻撃行動の研究に適用することを試みたが、部分的にしか成功しなかった。つまり、子どもの家庭内での親やきょうだいに對する攻撃行動は、モデルに適合したが、保育園での攻撃行動は、モデルに適合する局面とそうでない局面とが見出された。この最大の原因は、複雑な諸要因を統制することの困難性にあるといえる。

筆者(一九六〇)は、そのうちの一つの要因(子どものソシオメトリック・ステイタス)を統制して、ある程度成功したが、実際には、もっと数多くの要因の統制が必要である。たとえば、子どもが行なう攻撃行動に対する禁止的反応をとりあげてみても、それは、一つの源泉(親)から出て、その効果が他の対象(きょうだい、友

人、動植物、もの、投影検査で使用される多義的刺激など）に般化するだけではないこと、つまり親に対する攻撃行動の禁止のほかに、きょうだいげんかについての禁止もあれば、友人とのげんかについての禁止もなされるのである。また、禁止は親だけでなく、教師や友人、また社会一般が行なうものであり、子どもの攻撃行動の対象がそれに対し、どのように反応するかを考える必要がある。また、攻撃行動は、ある状況下では強化される（浄化、自分の主張が通る、他者による賞讃やほめまし）こともある。そのほか、刺激対象の特性（類似性）だけでなく、個人側の条件（人格要因、動機づけ）なども知らなければならぬ。このように、研究が進んでくると、どのような要因を統制しなければならぬかについての知識は、だんだんふえてくるが、それを実際に統制するのはきわめて困難である。なぜなら、それらの統制を要する諸要因は、相互に独立的でないからである。

三 測定の問題

——とくに親子関係の測定について——

1 信頼性と妥当性

すべての測定は、測定であるかぎり、ある程度の誤差を伴うものであるが、測定しようとしているものを（妥当性）、正確に（信頼性）測定して、はじめて意味ある測定がなされたといえる。

このさい、まず確かめられなければならないのは、信頼性の問題である。もし、独立変数、従属変数の両方の測定の信頼性が低ければ、両変数間の相関は不当に低められ、説明される変動の割合い

を、いちじるしく小さくしてしまう。

妥当性を確保するために必要なこととして、Hamblin & Vanderplas (1961) はつぎの二つをあげている。

(1) 概念的変数の信頼できる定義 あるものの妥当な測度を発展させるには、そのものがなにであるかを知らなければならぬ。そうすれば、それを信頼できる定義でもって記述することができる。研究者が、自分がなにを測定しているかを知り、または、発見する程度までしか、かれは測度にながが含まれ、測度からなにが除外されるべきかを知ることができない。

(2) 測定のゆがみの排除 Hamblin & Vanderplas (1961) は、可能なときには、直接観察がもっとも妥当性が高い測定方法だとする。そして、それができないときには、直接観察から推測を行ったり、被験者や他者による報告を使用する。その際には、ゆがみを除くために、投影検査を使ったり、面接のときにはラポールをつけたリ、また、二つまたはそれ以上の情報源を使用して、情報の cross-check を行なうのがよいとしている。

しかしながら、cross-check で測定ゆがみが除けるかどうか、また、もし除けたとしても、それで問題が解決したかは疑問が残る。ゆがみという際には、客観的に把握しうる親子関係という存在があつて、それを把握しようと試みて行なわれた記述の結果が、目標物との程度一致しているかを問題にするのであろう。ところが、つぎのような例を考察してみよう。ある親が子どもをだきしめていたとする。これは客観的に観察できることからである。ところが、母親はほんとうに子どもがかわいくて、だきしめているのかも知れないし、また、なにか心中に不安なことがあつて、それをまぎらせるために、子どもをだきしめているのかも知れない。一方、子

どもにしてみても、だかれながら、ほんとうにやさしい母親だと感じているのかも知れないし、また、自分がしたいことをしていたのに、急にだきしめたりしていやな母親だ、はやくはなしてほしいと思っているかも知れない。親も子どもも、それぞれの認知または事態の解釈によって、相手に対する行動を方向づけているのである。その事態について、母親と子どもとがもつ認知は、客観的事態はどうであろうとも、それぞれ母親と子どもにとっては、現実なのである。両者による認知は、一致していることもあるし、そうでないこともあろう。このような、認知の一致・不一致によってくりひろげられるダイナミックスをあきらかにするのが、有意意味な親子関係の記述であるといえる。その際にとるべき方法についての提案や若干の仮説は、別の箇所に発表している（小嶋、一九六三。小嶋、一九六五a）ので省略する。以上の考察から、もし、測定の妥当性と関連して、ゆがみということばを使用するとすれば、子どもや親にとって現実である親子の関係を正しく引き出せるかどうかの問題であるといったほうがより正しいと考える。

2 独立変数のとりあげかた

Schaefer & Bayley (1963) によると、親の行動の変数としてなをとりあげるかということに影響してきた理論は、S-R理論と、社会的心理学的理論の二つであるとされている。前者の理論によって影響された研究は、独立変数として、特定の育児法などをとりあげ、従属変数として、種々の基本的動因（口唇的、排他的、性的、攻撃的諸動因など）をとりあげることが多い。後者の理論によって影響された研究は、独立変数として、より *molar* な行動をとるということが多い。そこで使用される概念は、たとえば、拒否、

過保護、溺愛、無関心、厳格などである。これは、さききのべた相關的研究と関係がふかい。もっとも、この二つのアプローチは、必ずしもあい対立するものではなく、実際には、多くの研究は、両方の理論に関係する変数を扱っているのである。

筆者も、ここ八年來、主として後者の変数を扱ってきた。この後者の立場における独立変数の扱いかたを、筆者はさらに二つに分けて考えている。

一つは、このタイプに属する従来の代表的な研究のほぼ全部がとってきた方法である。ここで扱われる親の行動の変数は、いま述べたように、拒否とか過保護というような *molar* な行動の概念であって、そのような接触がなされる状況を捨象したものである。ここでは、一般的にいつて、各概念に関して、いくつかの観点が記されていて、観察者がそれに従って親を観察した結果を、総合的に把握して評定するか、または、いくつかの下位項目の合計点を用いて、各概念を数量化する。その際、観察のための観点として記述されていることがらや、下位項目では、具体的な状況と関連した親の行動の記述が多く行なわれる。前述の Schaefer & Bayley (1963) の研究での例をあげてみよう。ここでは、母親の行動についての観察ノートや面接記録によって、判定者が、各下位尺度 (*trait-action* という) ごとに、七点尺度で評定し、評定者間の一致度による尺度の信頼性の検討と、尺度間相関による項目分析を経て、一つの合成得点を導る。「この母親は、子どもを無視または拒否するか？」に関する下位尺度の一部を例としてあげてみよう。

2 母親は検査中に、まるで赤ん坊が他人の手にあることをよろこんでいるかのように、「場面を離れようとする」傾向がある

か？

5 母親は子どもの諸欲求を見すこす傾向があるか？

6 母親は、子どもが必らずしも自分の主たる関心事でないような印象を与えるか？

第二のは、行動がおこる状況を捨象しないで、どのような状況下で、どのような親の態度・行動がとられているかを記述するやりかたである。状況のわけかたには、いろいろの方法があろう。たとえば、もし子どもに施行するものであれば、子どもが親との関係においても諸欲求別に分類すること、また、子どもの生活領域の中にみられる有意意味な分化をもとにすること、また、家庭における親の機能の分析によることなど、いろいろ考えられる。最後のはあい、家庭が子どもに対してもつ機能として、保護機能と社会化機能を考え、親の行なう受容（愛情）―拒否（敵意）、支配（統制）―服従（自律）の二次元をそれぞれに対応させる考えかたは単純すぎよう。この第二の考えに立つて構成された、本格的な親子関係の記述法を、筆者はまだみていない。今後、この研究を発展させる必要があると考えている。この研究を進めるにあたつて、産業社会心理学の領域で行なわれているリーダーシップの研究や、モラール・サーヴェイなどは参考になる。困難性は、一人の上役のもとに、かなり同質的な部下が何人かいるというような対人関係のありかたが家族内では存在しないこと、また、家族の集団目標のごときものの存在が明確でないことなどである。

実さいには、前述の状況を捨象する方法(1)と捨象しない方法(2)との間に、各々の方法は位置づけられる。林・一谷・小嶋（一九六三）のCCCPは、(1)と(2)の中間的な形態をなした親子関係検査である。

3 素材の必要性

今日、親の態度・行動の記述に使用されている概念は、かなり洗練されたものである。そして観察者の立場から親子関係を記述するために有用であると認められた記述の枠組みを、そのまま子どもの立場からの記述にも使われたりしている。筆者（一九六三、一九六五a）がくり返し主張しているように、前者の記述の枠組が後者のそれにそのまま使用することが許されるかどうかは問題である。たとえば、「子どもにとつて真に現実である親の態度・行動」は、どのような枠組みによつて記述すればよいかを、従来からある枠組みを一たんで外視して検討すべきである。親子の接触の自然観察や参加観察も大切であろう。また、子どもの生活場面の分析や、子どもが親についてもっている概念の分析など、素朴な研究が必要である。筆者（一九六五b）は、小学生に、(a)「あなたのおとうさん」、(b)「あなたのおかあさん」、(c)特定の「よそのおとうさん」、(d)特定の「よそのおかあさん」、(e)「理想的なおとうさん」、(f)「理想的なおかあさん」に関して、(a)と(b)、(a)と(c)、(b)と(d)などを比較させ、個々の子どもに対する取り扱いかたにおいて、両者が似ている点とちがっている点とを書かせた。研究はまだ初步的段階にとどまっているが、子どもが親のどのようなところに注目しているか、それは発達のどのよう変化するかなどがうかがえて興味深い。より組織的な親子関係の記述法を発展させるまえに、このような素朴な研究方法を用いた研究が、もっとなされるべきだと考える。

四 理想的な親子関係

よく「のぞましい親子関係とはどんなものか」と問われるが、い

まのところ、確実な答はないようである。Symonds (1939) の、受容—拒否、支配—服従の二次元が直交する交点に位置する親が理想的だとする考えかたは、単純すぎよう。もし、理想的な親のありかたを、きめることができるようになったとしても、それは、個々の子どもにより、また、子どもの発達段階によってもことなるものであるといえる。いまのところ、理想的な親については、臨床心理学者、いやそれよりも人生経験豊かな、心理学には素人である人に聞いたほうが、意味があるようである。

しかし、親子関係の研究の目標の一つには、親子関係の改善が考えられる。もし、改善しようとするのなら、どのように改善するかという目標が必要である。Rogers (1959) は、治療過程がおこるための六つの条件をあげているが、子どもがのぞましい発達を遂げて行くために必要な親子関係の条件を考えることができないであろうかという問題を、私は一、二年まえに、ある先生からいただいた。いまにこの問題の開明にとりかかれたい。臨床家や、一般の親から得られる情報の集積が待たれる。

引用文献

- Ainsworth, Mary D. 1962 The effects of maternal deprivation : A review of findings and controversy in the context of research strategy. In World Health Organization. Deprivation of maternal care: A reassessment of its effects. *WHO publ. Hlth. Pap.*, No. 14, 97-165.
- Baldwin, A. L. 1948 Socialization and the parent-child relationship. *Child Development*, 19, 127-136.

- Bandura, A. & Walters, R. H. 1959 *Adolescent aggression*. New York : Ronald.
- Dollard, J., & Miller, N. E. 1950 *Personality and psychotherapy*. New York : McGraw-Hill.
- Finney, J. C. 1964 A factor analysis of mother-child influence. *J. gen. Psychol.*, 70, 41-49.
- Hamblin, R. L., & Vanderplas, J. M. 1961 Some notes on the strategy of research. In J. C. Gidewell (Ed.), *Parental attitudes and child behavior*. Springfield, Ill. : Charles C Thomas. Pp. 188-206.
- 林 勝造・一谷 彌・小嶋秀夫 一九六三 C C P 解説 親に対する子どもの認知像の検査法 大阪 大成出版社牧野書房
- Kessen, W. 1960 Research design in the study of developmental problems. In P. H. Mussen (Ed.), *Handbook of research methods in child development*. New York : Wiley. Pp. 36-70.
- 小嶋秀夫 一九六〇 親子関係と幼児の社会化 教育心理学研究, 七, 二〇〇—二〇九。
- 小嶋秀夫 一九六一 親子関係の研究—幼児の攻撃性 京都大学大学院教育学研究科修士論文 (未発表)
- 小嶋秀夫 一九六三 親子関係の心理学的分析 京都大学教育学部紀要, 九, 一二五—一四四。
- 小嶋秀夫 一九六五 a 親子関係把握の方法論 金沢大学教育学部紀要 人文科学社会科学編, 一三, 一六五—一七八。
- 小嶋秀夫 一九六五 b 親子関係記述の興味ある次元 日本心理学会第二九回大会発表論文集 三〇八

- Miller, N. E. · 1948 Theory and experiment relating psycho-analytic displacement to stimulus-response generalization. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 43, 155-178.
- Murphy, Lois B. et al. 1962 *The widening world of childhood*. New York : Basic Books.
- Patterson, G. R., Littman, R. A., & Hinsey, W. C. 1964 Parental effectiveness as reinforcers in the laboratory and its relation to child rearing practices and child adjustment in the classroom. *J. Pers.*, 32, 180-199.
- Rogers, C. R. 1959 A theory of therapy, personality and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework. In S. Koch (Ed.), *Psychology : A study of science*. Vol. 3. *Formulations of the person and the social context*. New York : McGraw-Hill. Pp. 184-256.
- Schaefer, E. S., & Bayley, Nancy. 1963 Maternal behavior, child behavior, and their intercorrelations from infancy through adolescence. *Monogr. Soc. Res. Child Develpm.*, 28, No. 3 (Serial No. 87).
- Symonds, P. M. 1939 *The psychology of parent-child relationships*. New York : Appleton-Century-Crofts.
- Whiting, J. W. M., & Child, I. L. 1953 *Child training and personality : a cross-cultural study*. New Haven : Yale Univer. Press.